

時間探究としての『告白』第11巻第14章～第28章

伊佐敷 隆弘

Confessiones XI. 14-28 as an Investigation of Time

Takahiro ISASHIKI

要 旨

アウグスティヌス『告白』第11巻の第14章から第28章を、それが置かれているコンテキストから引き離し、独立した時間論として読む。アウグスティヌスの時間探究は、日常の談話における時間についての3種類の語りに含まれている前概念的時間理解の間の不整合の解決を目指して進む。彼は、「時間の動的性格」から「過去非在説・未来非在説・現在瞬間説」を導き、他方、「過去物語・未来予言」と「時間の長さの測定」から「過去と未来の存在」を導く。これらの間の不整合を彼は「記憶としての過去」「予期としての未来」によって回避する。しかし、(1)予期や記憶の「長さ」、(2)時間の向きと「痕跡」「意図」「原因」「徴候」との関係、(3)時間の動的性格への心の寄与などについては彼は十分な説明を与えていない。

目 次

はじめに

1. 前概念的時間理解

- (1) 時間に関する知と無知
- (2) 前概念的時間理解の役割

2. 時間の動的性格と非存在への親近性

- (1) 時間と永遠の対比
- (2) 過去・未来の非存在
- (3) 時間の非存在への親近性

3. 時間についての3種類の語り

- (1) 動的性格、過去物語・未来予言、長さの測定
- (2) 3種類の語りの間の不整合

- (3) 時間探究の方向
- 4. アウグスティヌスの議論の流れ
- 5. 過去物語と過去が存在
 - (1) 過去の存在についての不整合
 - (2) 記憶としての過去
- 6. 未来予言と未来の存在
 - (1) 自分の未来の行為についての語り
 - (2) 未来の出来事についての語り
 - (3) 予期としての未来
- 7. 時間の動的性格と現在瞬間説
- 8. 時間の長さの測定についてのアポリア
 - (1) 時間の長さに関する語り
 - (2) 時間の長さに関する不整合
- 9. 運動と時間
 - (1) 天体の運動
 - (2) 物体一般の運動
 - (i) 同一の物体が運動と静止を繰り返す場合
 - (ii) 複数の運動の比較
- 10. 過ぎ去りつつある時間
 - (1) 過ぎ去りつつある時間と過ぎ去ってしまった時間
 - (2) 過ぎ去りつつある時間の測定不可能性
- 11. 心の広がりとしての時間
 - (1) 心的内容の測定
 - (2) 予期・記憶の「長さ」
- 12. 時間の向き
 - (1) 心の作用の順序
 - (2) 痕跡・意図・原因・徴候と時間の向き
- 13. 現在について
 - (1) 存在と現在との同一視
 - (2) 心的作用がなされる時間としての現在
 - (3) 直覚の持続
 - (4) 時間の動的性格と心の働き

おわりに

はじめに

アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) の『告白』(*Confessiones*) 第11巻の第14章から第28章は時間に関する考察として著名なテキストである。本論文では、このテキストを、それが置かれているコンテキストからあえて引き離し、独立した時間論として読む。

このテキストは第11巻(全31章)全体の永遠論および創造論の中に含まれており、また、第

11巻自体は第11巻～第13巻でアウグスティヌスが行う『創世記』冒頭部分の解釈の一部をなす。そして、『告白』というこの書物全体は「自己と神の探究」という大きな主題を持ち、また、この大きな主題は当時のアウグスティヌスおよびキリスト教会の置かれた状況の中で立てられている。アウグスティヌス解釈としてはこれらのコンテキストを無視できないのは確かである。しかし、本論文ではこれらのコンテキストについては考慮しない。それは、本論文の目的が、「アウグスティヌスの思想を解明する」ことにではなく、「時間の解明に寄与しうる議論をアウグスティヌスから学ぶ」ことにあるからである。

したがって、また、本論文では、アウグスティヌスの時間論の結論（「心の広がりとしての時間」）よりも、むしろ、その結論へ至るまでの彼の時間探究の過程に着目し、そこにおいて、どのような論点が提出され、どのような論証がなされているのかに着目する。

1. 前概念的時間理解

（1）時間に関する知と無知

第14章の時間探究は「時間とは何であるのか」という問いとともに始まる。しかし、この問いに続けてすぐにアウグスティヌスは時間知について次の有名な言葉を述べる。

「時間とは何であるのか。誰も私に問わなければ私は知っている。しかし、誰か問う者に説明しようとする私は知らない。」（第14章）

この言葉は、そのネガティブな側面、即ち「時間とは何であるのかを説明できない」という無知の面が強調されると、時間論の困難さを表すせりふとして読むことができる。しかし、この言葉にはポジティブな面もある。即ち、「時間とは何であるのか。誰も私に問わなければ私は知っている」という知の面である。

これはいかなる時間知なのか。アウグスティヌスは「私たちの日常の談話において時間ほど私たちに身近で熟知されたものとして語るものがあるだろうか。私たちは自分が時間について語る時時間を理解しており、他人が時間について語るのを聞くときにも時間を理解している」（第14章）と言う。即ち、この時間知は、「日常の談話における時間についての語りに伴う知」である。時間についての語りとして、彼は、「この時間はあの時間より長い」「この音節はあの音節の2倍の時間である」「彼がこのことをしてからどれほどになる」などの言い方を例に挙げる。我々はこれらの言い方を理解し、日常の談話においてお互いの間でそれらを用いている。その限り、時間とは何であるかを我々は理解していると言ってよい。しかし、その理解の内容を言葉で説明しようとするときできない。我々は言わば「前概念的時間理解としての時間知」は持っているが、「説明能力としての時間知」は持っていない。これが、アウグスティヌスの時間探究の出発点における我々の状態である。前概念的時間理解はアウグスティヌスも読者ともに既に所有していると想定された上で『告白』の時間探究は進んで行く。

それゆえ、アウグスティヌスの時間探究は前概念的時間理解の内容を言葉にもたらそうとする営みとして捉えることができる。あるいは、自らが既に所有している前概念的時間理解から出発して「説明能力としての時間知」へ至ろうとする過程として捉えることができる。

（2）前概念的時間理解の役割

そして、前概念的時間理解は、ネガティブには（「前概念的」であるが故に）探究の出発点

における無知の状態であるが、ポジティブには（「時間理解」であるが故に）探究の「導きの糸」としての役割を果たしうる。例えば、アウグスティヌスは探究の出発点において時間の性格づけを行うが、その拠り所になっているのがこの前概念的な時間理解である。彼は先に引用した時間知についての言葉に続けて次のように言う。

「しかし、私は次のことを知っていると確信を持って言える。即ち、『何も過ぎ去らなければ過去という時間はなく、何もやって来なければ未来という時間はなく、何も存在しなければ現在という時間はない』と。」（第14章）

彼は時間のこの性格づけに関してその論拠を何ら示していない。にもかかわらずこのような「確信」を持てるのは彼が前概念的な時間理解に基づいてこれらの性格づけを行っているからであろう。実際、我々は「時の過ぎるのは早い」とか「明日が待ち遠しい。早く明日にならないかな」などの言い方をごく普通に用いているが、これらの言い方には上のような時間の性格づけが反映していると考えられる。

また、アウグスティヌスは、彼の時間探究の途上においてさまざまな自問自答を繰り返す。彼は性急な断定を避け、行きつ戻りつしながら考察を進めて行く。そして、考察が行き詰まったとき、問題の解決を神に祈ると同時に、前概念的な時間理解に立ち返って考察の立脚点を確認し、それから再び前に進んで行く。（第21章～第22章、第25章～第26章など）¹⁾。

このように、前概念的な時間理解は、アウグスティヌスの時間探究において、主導的役割を果たしている。

2. 時間の動的性格と非存在への親近性

（1）時間と永遠の対比

先に引用したように、アウグスティヌスは、過去と未来について、「何も過ぎ去らなければ過去という時間はなく、何もやって来なければ未来という時間はない」（第14章）と言っているが、さらに、現在について、彼は「現在が常に現在であって、過去に移り行かないなら、それはもはや時間ではなく永遠であろう。現在は過去に移り行くことによってのみ時間である」（第14章）と言う。アウグスティヌスはここで「時間の動的性格」について述べている。何かがやって来て、今を経て、過ぎ去って行く。未来から現在を経て過去へと移行する。このような流れてやまないものとして、彼は時間を性格づけている。この性格づけは、先述のように、我々の持つ前概念的な時間理解に基づくものである。

時間のこの動的性格は、実は『告白』の第11章や第13章において既に「永遠（aeternitas）と時間（tempus）の対比」という仕方で触れられていた。アウグスティヌスは言う。

「永遠においては、過ぎ去るものは何もなく、全体が現在にある。これに対し、いかなる時間も全体が現在にあることはない。」（第11章）

「あなたの年〔永遠〕は来ることも行くこともない。これに対し、私たちの年〔時間〕は、すべての年が来るために、或る年は来て、或る年は行く。」（第13章）

このように、彼は「常に静止する永遠」と「決して静止しない時間」とをはっきりと対比する。時間の動的性格はアウグスティヌスの時間探究の根本前提と言うべき地位を占めている。

(2) 過去・未来の非存在

そして、アウグスティヌスは時間の動的性格から時間の非存在への親近性を導出する。まず、過去と未来の非存在について彼は言う。

「では、過去と未来はどうやって存在するのか。過去はもはや存在せず、未来はいまだ存在しないのだから。」(第14章)

ここで、彼は、次の①②(時間の動的性格)から③④(時間の非存在)をそれぞれ導いている。

何も過ぎ去らないなら、過去という時間は存在しない。(時間の動的性格) ……………①

何もやって来ないなら、未来という時間は存在しない。(時間の動的性格) ……………②

過去はもはや存在しない。(時間の非存在) ……………③

未来はまだ存在しない。(時間の非存在) ……………④

時間の動的性格から時間の非存在を導出することが可能か否か、これらの点は議論になりうる。しかし、その点に関しては保留²⁾してアウグスティヌスの議論を辿ってみよう。

(3) 時間の非存在への親近性

過去と未来が存在しないとすると、残るのは現在だけであるが、この現在についても「存在している」と無条件には言えないとアウグスティヌスは考えている。というのは、先にも述べたように「現在は過去に移り行くことによってのみ時間である」が故に、彼によれば、現在について次の懷疑が生じうるからである。

「存在する原因が非存在〔過去〕に成ることであるもの〔現在〕が存在していると言うことができるか。」(第14章)

過去や未来が言わば「存在しないものとして存在している」時間であるなら、現在は言わば「存在しなくなるものとして存在している」時間だということとなる。そして、そのようなものは存在しているとは言えないのではないか、というのがこの懷疑である。もちろんこの懷疑を受け入れるかどうかは議論になりうる。が、とにかくアウグスティヌス自身の推論は次のように進む。(この懷疑は次の⑥から⑦を導く際に使われている。)

現在は過去に移り去ることによってのみ時間である。(時間の動的性格) ……………⑤

現在は存在しなくなる故にのみ存在する。(③と⑤から) ……………⑥

現在は存在しないのかもしれない。(時間の非存在) ……………⑦

そして、過去と未来の存在に関する先の懷疑(③④)と⑦から時間の存在に関する次の懷疑が完成する。

時間は存在しないのかもしれない。(時間の非存在) ……………⑧

こうして、アウグスティヌスは、第14章において、我々の誰もが持つ前概念的時間理解から時間の動的性格を導き、さらに時間の動的性格から時間の非存在への親近性を導いている。

ただし、現在の存在についてのアウグスティヌスの態度は、実際には、過去や未来の非存在に比べてすっきりしたものではなく微妙なゆれを見せる³⁾。

また、「存在しないものとして存在する過去や未来」「存在しなくなるものとして存在する現在」という概念規定が矛盾を含んでいないかどうか当然議論になりうる。

時間の動的性格は確かにアウグスティヌスの時間探究を一貫しているが、そこから時間の非存在への親近性を導く第14章は彼の時間探究のスタート地点に過ぎない。というのも、我々の持つ前概念的時間理解から導かれるのは時間の動的性格だけではないからである。

3. 時間についての3種類の語り

(1) 動的性格、過去物語・未来予言、長さの測定

前概念的時間理解は日常の談話における時間についての語りに伴いそれを支えるものであるが、アウグスティヌスはそのような語りとして、時間の動的性格を表現するものの他に、さらに2種類の語りを挙げている。一つは、過去を物語ったり、未来を予言したりすることであり、もう一つは時間の長さを測ることである。前者は例えば「自分の少年時代を思い出して語ること」や「曙光を見て、『もうすぐ日が昇る』と言うこと」(第18章)であり、後者は先に本論文第1節で挙げた「この時間はあの時間より長い」「この音節はあの音節の2倍の長さである」「彼がこれをしてからどれほどになる」などの言い方のことである。

こうして、アウグスティヌスは「日常の談話における時間についての語り」として、3種類のものを挙げていることになる。即ち、

- (1) 時間の動的性格の表現
- (2) 過去物語・未来予言
- (3) 時間の長さの測定

の三つである。これらの言い方はいずれも日常の談話において我々の持つ前概念的時間理解に基づいて用いられている。

(2) 3種類の語りの間の不整合

しかし、それぞれに対応する前概念的時間理解の内容の間には或る不整合が含まれている。それは、時間の存在に関する不整合である。というのは、アウグスティヌスは、(1)の「時間の動的性格」から「時間の非存在への親近性」を導くのに対し、(2)の「過去物語・未来予言」や(3)の「時間の長さの測定」からは「時間の存在」を導くからである。

即ち、彼は、時間の動的性格に基づき、「過去はもはや存在しない」「未来はまだ存在しない」および、「現在が少しでも広がりを持てば、それは過去と未来に分かたれるから、現在にはどんな広がりもない」ということを導く。結局、アウグスティヌスにとって、時間は「存在しない過去」「存在しない未来」および「広がりを持たず常に非存在(過去)へと移りゆく現在」、これら三者から成っている。時間の動的性格に伴う時間理解にはこのように時間の非存在への親近性が含まれている。

しかし、他方、アウグスティヌスは「過去物語・未来予言」から「過去と未来の存在」を導く。即ち、「未来が存在しないなら、存在しないものを見ることはできず」、未来を予言することできない、また、「過去が存在しないなら、それを認識することはできず」、過去を真実に物語ることはできない、「それゆえ、未来も過去もやはり存在するのだ」。アウグスティヌスはこのような言う。

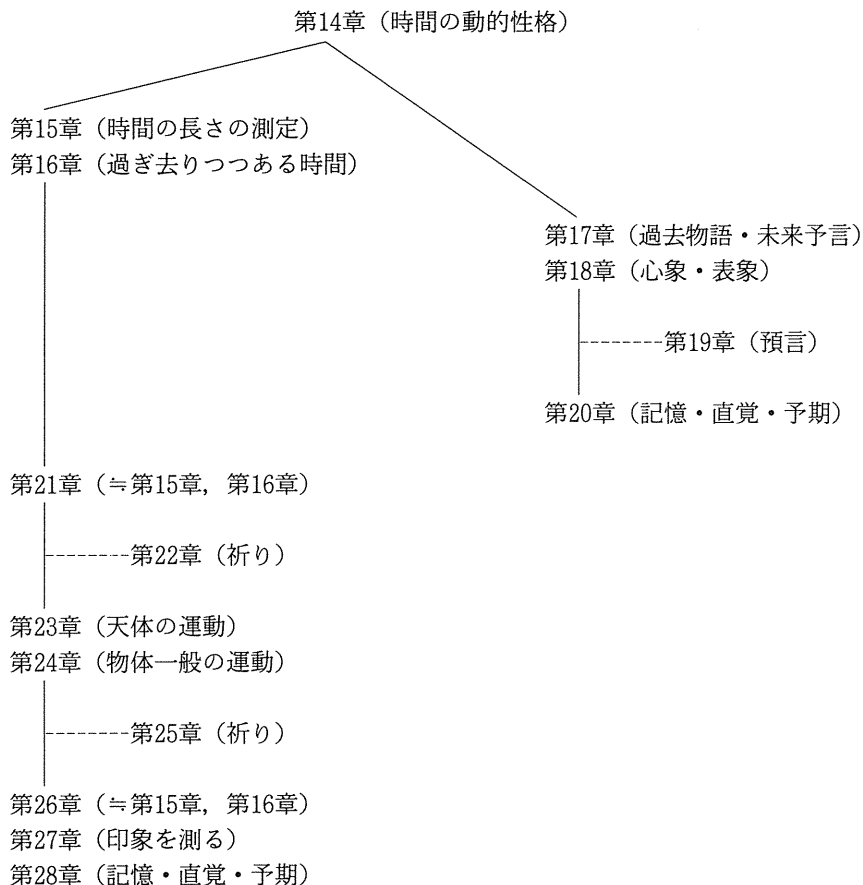
また、「時間の長さの測定」について、彼は「まだ存在しないもの〔未来〕を測ることはできない」、「広がりのないもの〔現在〕を測ることはできない」、「もうないもの〔過去〕を測ることはできない」と言う。しかし、「私は時間を測っている。それは知っている」のであるから、結局、私が測る「時間」は存在しているはずだ、ということになる。

(3) 時間探究の方向

本論文第1節で述べたように、アウグスティヌスの時間探究において前概念的な時間理解はその導きの糸であり、その拠り所である。しかし、そこには時間の存在をめぐる上述のような不整合が含まれている。この不整合をいかにして解消するか。『告白』第11巻第14章～第28章の時間探究はこの不整合の解決を目指して進んでいると見ることができる。即ち、「時間の動的性格」「過去物語・未来予言」「時間の長さの測定」、これらをいかに整合させるか、という問いが探究を推し進めていると見ることができる。そして、それを通して、「過去や未来は存在するのか、存在しないのか」、「現在とは何であるのか」などの時間に関するアポリアに対してアウグスティヌスは答えを出そうとするのである。

4. アウグスティヌスの議論の流れ

ここで『告白』第11巻第14章～第28章における議論の流れを見ておく。議論全体の流れを図示すると下図のようになる。



本論文前節で述べたように、議論は「時間の動的性格」「時間の長さの測定」「過去物語・未来予言」という時間についての三種類の語りを巡って進む。「時間の動的性格」は第14章で、「時間の長さの測定」は第15章で、「過去物語・未来予言」は第17章で、それぞれ初めて登場する。「過去物語・未来予言」と「時間の動的性格」との不整合は、第17章～第20章で扱われ、第20章において「記憶 (memoria)・直覚 (contuitus)・予期 (expectatio)」という形で解決がなされる。そして、第21章から再び「時間の長さの測定」と「時間の動的性格」との不整合の問題が検討され、途中、第23章～第24章での「運動」の検討を経て、最後の第28章において、第20章と同様に「記憶 (memoria)・直覚 (attentio)・予期 (expectatio)」という解決がなされる。時間の長さに関するアポリアは第15章と第16章で最初に提出された後、第21章と第26章でも再度提出されている。結局、第14章～第28章の議論は次の4つの部分からなっている。

- (1) 時間の動的性格 (第14章)
- (2) 時間の長さの測定 (第15章, 第16章)
- (3) 過去物語・未来予言 (第17章～第20章)
- (4) 時間の長さの測定再論 (第21章～第28章)

まず、過去物語・未来予言と時間の動的性格の不整合に関するアウグスティヌスの議論を見てみよう。

5. 過去物語と過去が存在

アウグスティヌスは時間の動的性格から時間の非存在への親近性を導くが、他方で、過去物語と未来予言から時間の存在を導く。彼は次のように言う。

「もし未来の物事がまだ存在しないのなら、未来の物事を予言した人々はどこでそれを見たのか。存在しないものを見ることはできないだろう。もし心のうちで過去の物事を認識しないなら、過去の物事を物語る人々はそれらを真実として語ることはできないだろう。もし過去の物事が存在しないなら、それらは認識できないだろう。それゆえ、未来の物事も過去の物事もやはり存在する。」(第17章)

(1) 過去が存在についての不整合

まず、過去についてだけ考えてみると、アウグスティヌスは次の互いに矛盾する主張をしていることになる。

過去は存在しない。(∵時間の動的性格から)③

過去は存在する。(∵過去物語の存在から)⑨

この矛盾の解消方法としては少なくとも次の(甲)(乙)の2通りがありうる。

(甲) ③で否定されている「存在」と⑨で肯定されている「存在」とは別種の存在である。

(乙) ③で存在が否定されている「過去」と⑨で存在が肯定されている「過去」とは別種の過去である。

アウグスティヌスが実際に採ったのは(乙)の解決策であるが、(甲)についても彼は少しだけ触れている。第17章で時間の存在に関して次の(a)～(c)の3つの可能性を列挙しているが、最後に挙げている(c)が(甲)に相当する。

(a) 過去も現在も未来も存在する。

(b) 過去や未来は存在せず、現在だけが存在する。

(c) 過去も現在も未来も存在するが、過去と未来はどこかに隠れている。

(c)の可能性においては、過去は「存在するが隠れて」おり、現在は「存在しかつ現れて」ということになる。つまり、③で否定されているのが過去の言わば「顕在的存在」であるのに対し、⑨で肯定されているのは過去の言わば「潜在的存在」であって、両者は異なる種類の「存在」だ、ということになる。このように(c)は(甲)の方向での解決策である。

しかし、アウグスティヌスは(甲)ではなく(乙)の解決策を採った。即ち、⑨で存在が肯定されている「過去」とは、実は「記憶」(第20章)であり、③で存在が否定されている「過去」とは、その記憶を痕跡として心に刻み過ぎ去った事物(第18章)のことである。アウグスティヌスはこのように考えている。その議論を見てみよう。

彼は自問自答する。「過去は存在する」。では、「どこに存在するのか?」「どこであろうと、そこにおいては、過去は現在である。なぜなら、現在でなければ存在しないことになるから。(そこにおいて『過去』であるなら、『存在している』ではなく『存在していた』ということになり、そこにおいては存在していない、ということになるから。)」(第18章)

ここでアウグスティヌスは、先に時間の動的性格から導いた「過去の非存在」を前提して議論している。つまり、彼は「過去は存在しない」という③の主張をあくまでも維持するということを確認しているのである。と同時に、「存在するものは現在においてのみ存在する」ということ、即ち、「現在であることを存在するための必要条件とみなす」ということをここで主張している⁴⁾。

こうして、彼は過去物語という日常の談話の存在から過去の存在を導きつつ、他方で、過去の非存在の主張も維持し、その結果、「過去の存在」は「過去が現在として存在すること」であるという主張に至っている。ここで「現在としての過去」という形容矛盾な存在が要請されていることになる。これを「過去もその時点においては現在である。(例えば、昨日も昨日の時点では今日である)」という陳腐な意味に取ることも可能だが、アウグスティヌスの真意はそうではない。というのは、彼は結局「現在としての過去」とは即ち「現在における記憶」であるという方向へ議論を進めて行くからである。つまり、「現在としての過去」における「現在」とは「昨日の時点での今日」のような「或る時点に相対化された現在」ではなく、我々が知覚し行為する「この現在」あるいは「端的な現在 (present simpliciter)⁵⁾」のことである。では、「現在としての過去」とは何か。

(2) 記憶としての過去

アウグスティヌスは過去物語を次のように分析する。(第18章)

我々が過去について物語るとき記憶の中から取り出すのは「過ぎ去った事物」(A)そのものではない。例えば、我々が自分の少年時代について物語るとき、記憶の中から取り出すのは「自分の少年時代」(A)そのものではない。「過ぎ去った事物」(A)そのものは過去という時間の中にあり、過去はもはや存在しない。それゆえ、「自分の少年時代」(A)はもはや存在しない。しかし、この事物(A)は過ぎ去るとき、感覚を通して私の心の内に心象 (imago) (B)を足跡を刻むように残す。そして、我々が自分の少年時代(A)について物語るとき、記憶の中から取り出すのはこの心象(B)から考えられた言葉(C)である。自分の少年時代(A)はもはや存

見ないが、この心象(B)は現在という時間の中に存在しており、そこにおいて私によって見られるのである。

アウグスティヌスはこのように分析している。以上の分析をいくつかの命題に分けると次のようになる。

心象(B)は過去の事物(A)が心の内に刻み込んだものである。……………⑩

過去の事物(A)は存在しない。……………⑪

心象(B)は存在する。それは現在において存在する。……………⑫

心象(B)をもとにして過去物語(C)がなされる。……………⑬

これらの内、⑪は先の③即ち「過去は存在しない。(∴時間の動的性格から)」という命題を満たし、他方、⑫は先の「現在としての過去」という要請を満たす。

こうして、彼は、普段我々が「過去」と呼んでいるものは実は存在しておらず、存在しているのは「過去の現在 (praesens de praeteritis)」即ち記憶 (memoria) であると主張するに至る(第20章)。この「過去の現在」という語句に含まれる「の (de)」をどのように理解するかは難しいが、過去物語の分析に基づけば次のように考えられる。自分の少年時代(A)が過去という時間の中であって既に存在しないのに対して、自分の少年時代(A)の心象(B)は現在という時間の中であって存在している。つまり、この心象は「(過去に属しかつ存在しない) 少年時代の (現在に属しかつ存在する) 心象」即ち「過去の現在」という構造を持っている。そして、この心象(B)は少年時代(A)が私の心に刻み込んだものであるから、「過去(A)の現在(B)」とは「過去(A)が現在(B)を刻み込んだ」という関係だということになる。図示すると、次の表のようになる。

	A：事物	B：心的内容	C：言葉
過去物語	過去の事物 例：私の少年時代 (存在しない)	記憶 (存在する) (現在に属する) (A が私の心に刻み込んだ)	過去物語 (存在する) (現在に属する) (B に基づく)

尤も、「事物が心に心象を刻み込む」そして「事物が存在しなくなっても刻み込まれた心象は存在し続ける」というのがいかなることであるのか、(それは結局は「記憶とは何か」という問いになるが、) このことについて、アウグスティヌスは詳しいことは述べていない。ただ、我々の心にそのような働きがあることに彼は確信を持ち、その確信に基づき、「過去物語という日常の談話の存在から導かれる過去の存在とは、現在における心象の存在である」という以上の議論を行っているのである。

6. 未来予言と未来の存在

それでは、未来の物事についての語りについてはどのような分析をアウグスティヌスは行っているか。過去の場合と同様、「未来は存在しない」という先の④の主張は維持され、その主張と衝突しないような未来予言の分析を彼は求めていく。彼は(1)自分の未来の行為について

て語る場合と（２）未来の出来事について語る場合とについて分析している。（第18章、第20章）

（１）自分の未来の行為についての語り

アウグスティヌスは具体例は挙げていないが、例えば、椅子に座っていた私が「今立つよ」（C）と言い、そして、立ち上がったとする。「今立つよ」と言ったとき、私はまだ立っていない。「私が立つ」という行為はまだ存在していない。しかし、「私はこれから立とう」という意図（*praemeditatio*）（B）は既に存在している。結局、未来の行為（A）はまだ存在しないが、その行為の意図（B）は既に存在しており、私の「今立つよ」という予告（C）はこの意図に基づいて発せられた言葉である。私は「これから立とう」という自分の意図（B）を実現すべく、立ち上がる。私の未来の行為（A）は私の現在の意図（B）の実現である。即ち、意図（B）に基づいて行為（A）がなされる。これらの関係を図示すると、次の表のようになる。

	A：事物	B：心的内容	C：言葉
未来予言 （行為）	未来の行為 例：起立 （存在しない） （Bの実現）	意図 例：これから立とう （存在する） （現在に属する）	行為の予告 例：「今立つよ」 （存在する） （現在に属する） （Bに基づく）

（２）未来の出来事についての語り

未来の出来事の場合もアウグスティヌスは同型の議論をする。即ち、未来の出来事（A）そのものはまだ存在しないが、その概念（*conceptio*）ないし表象（*imaginatio*）（B）は既に存在する、という議論である。

しかし、その場合、未来の出来事（A）とその表象（B）とをつなぐものは何か。過去の出来事（A）の場合は、当該出来事そのものが私の心に心象（B）を刻んでいった。私の未来の行為（A）の場合は、私自身が自分の意図（B）を実現すべく行為し、私の意図（B）の内容が私の行為（A）の内容となる。しかし、未来の出来事の場合、未来の出来事（A）そのものが私の心に心象（B）を刻み込むというのはいないであろうし、未来の出来事（A）を自分の意図（B）どおりに実現させることも（私の行為以外の場合）ありえないであろう。とすれば、未来の出来事（A）とその表象（B）とをつなぐものは何か。

アウグスティヌスは「原因（*causa*）」ないし「徴候（*signum*）」が両者をつなぐと考えていると思われる。彼の挙げる「日の出」という例で考えよう。今地平線の下に太陽がある。まだ夜は明けていない。しかし、既に地平線からは曙光が見えており、それを見た私は「もうすぐ日が昇る」と言ったとしよう。私は日の出という未来の出来事（A）について語っている。私は未来を予言したわけである。しかし、未来はまだ存在しないとしたら、私は何を見てこのような予言をしているのか。日の出という未来の出来事（A）はまだ存在していない。しかし、その徴候（D）である曙光は既に存在している。私はこの曙光（D）に基づいて、まだ存在しない日の出（A）の表象（B）を心に思い浮かべる。そしてこの表象（B）をもとにして「もうすぐ日が昇

る」という言葉(C)が私の心から出てくる。

以上の分析をいくつかの命題に分けると次のようになる。

未来の出来事(A)は存在しない。……………⑭

未来の出来事の原因や徴候(D)は存在する。それらは現在において存在する。……⑮

この原因や徴候(D)に基づいて表象(B)が得られる。……………⑯

表象(B)は存在する。それは現在において存在する。……………⑰

表象(B)をもとにして未来の予言(C)がなされる。……………⑱

これらの内、⑭は先の④即ち「未来は存在しない。(・:時間の動的性格から)」という命題を満たし、他方、⑰は先の「現在としての未来」という要請を満たす。図示すると、次の表のとおりである。

	A：事物	B：心的内容	C：言葉	D
未来予言 (出来事)	未来の出来事 例：日の出 (存在しない)	表象 (存在する) (現在に属する) (Dに基づく)	未来予言 例：「もうすぐ 日が昇る」 (存在する) (現在に属する) (Bに基づく)	原因・徴候 例：曙光 (存在する) (現在に属する) (Aの原因・徴候)

(3) 予期としての未来

アウグスティヌスは、未来の行為の場合の「意図」と未来の出来事の場合の「概念・表象」とを合わせて「予期 (expectatio)」と呼び、普段我々が「未来」と名づけているものは実は存在しておらず、存在しているのは「未来の現在 (praesens de futuris)」即ち予期であると主張するに至る (第20章)。即ち、日の出という出来事(A)や私の起立という行為(A)が未来という時間の中にあってまだ存在しないのに対して、日の出や起立の予期(B)は現在という時間の中にあって存在している。つまり、この予期は「(未来に属しかつ存在しない) 日の出や起立という物事の (現在に属しかつ存在する) 予期」即ち「未来の現在」という構造を持っている。そして、未来の物事と現在の予期をつなぐのは、私の行為の場合は「その行為が私の意図の実現だ」ということであり、出来事の場合は「その出来事の原因や徴候に基づいて予期がなされる」ということである。

以上見てきたように、アウグスティヌスは、過去物語や未来予言における「過去」や「未来」を、記憶や予期という心的内容に置き換えることによって、時間の動的性格との整合性を確保しようとしているのである⁶⁾。

7. 時間の動的性格と現在瞬間説

ここで現在の長さについてのアウグスティヌスの見解を見ておく。

彼は時間の動的性格から過去と未来の非存在を導いたが、その際、現在についても、「存在しなくなること (即ち、過去へと移り変わる) が存在の原因である」が故に、「果たして

存在すると言えるのか」という懷疑を提起していた。

しかし、他方で、過去物語や未来予言について、過去や未来は確かに存在しないが、記憶や予期は存在するとしていた。そして、その際、記憶や予期は現在において存在しているとされていた（第18章）のである。

このように、現在の存在についてアウグスティヌスは互いに反対の傾向の性格付けをしている。どのように解釈すればよいか。ここで、「現在には広がりがあるのか」についての彼の検討（第15章）を見てみよう。アウグスティヌスは「現在はいかなる広がり（spatium）も持たない」と主張する。その議論は次のようなものである。

まず100年は現在ではありえない。なぜなら、100年の内最初の1年が経過しているとき、その1年は現在だが残りの99年は未来であり、次の第2年が経過しているとき、先の1年は過去、次の1年は現在、残りの98年は未来だからである。同様に、1年は現在ではありえない。12ヵ月のうちの或る月が現在だとすると、それより前の月は過去、後の月は未来だからである。1月、1日、1時間についても、同様の議論により、それらは現在ではありえない。どんな長さの現在を考えても、それは過去と未来に分かれるであろう。

このような議論によって、アウグスティヌスは「現在にはどんな長さもありえない」という結論に至るのである。これを「現在瞬間説」と名づけよう。この議論もまた、時間の動的性格から導かれている。こうして、現在はたとえ存在するとしても、その存在は極めてはかない存在だということになる。現在は常に過ぎ去って行く。未来はやって来て現在となるが、一瞬の後には過去へと過ぎ去って行く。過去も未来も存在しない。未来という非存在は一瞬だけ現在という存在になるが、現在はいかなる広がりも持たず、ただちに、過去という非存在になってしまう。時間は「まだ存在しないもの〔未来〕から、広がりを持たないもの〔現在〕を経て、もはや存在しないもの〔過去〕へ過ぎ去る」（第21章）。こうして、現在とは、過去と未来という非存在に挟まれた長さを持たない存在であり、かつ、非存在になることでのみ存在できる時間である。仮に現在の存在が認められるとしても、それはこのようなはかない存在である。アウグスティヌスは時間の動的性格からこのような帰結を導き出す。現在の存在についてのアウグスティヌスの態度は微妙だが、いずれにしても、時間の動的性格から彼が導くのは、時間の非存在への親近性である。

しかし、現在瞬間説・過去非在説・未来非在説というこれらの帰結は、果たして我々の日常の談話における時間についての語りと整合しうるか。過去物語や未来予言との整合性に関しては、本論文の第5節と第6節で取り上げたように、アウグスティヌスは過去物語における「過去」や未来予言における「未来」を「現在において存在している心的内容（記憶や予期）」であるとみなすことで整合性を確保した。では、3つの種類の語りのうち、まだ検討していなかった「時間の長さの測定」に関してアウグスティヌスはどのような議論を行なうのか。

8. 時間の長さの測定についてのアポリア

（1）時間の長さに関する語り

日常の談話における時間の長さに関する語りの例をアウグスティヌスは数多く挙げている。以下の通りである。

「長い時間」「短い時間」「長い過去の時」「長い未来の時」「短い過去の時」「短い未来

の時」(第15章)

「この時間はあの時間よりも長い」(第16章, 第26章)

「この時間はあの時間よりも短い」(第16章)

「この時間はあの時間と同じ長さである」(第16章, 第21章)

「この時間はあの時間の2倍である」(第16章, 第21章, 第26章)

「この時間はあの時間の3倍である」(第16章)

「彼がこのことを言ってからどれほどになる」「彼がこのことをしてからどれほどになる」(第22章)

「どれほどの間それを見ない」(第22章)

「この音節はあの短い音節の2倍の時間である」(第22章, 第26章, 第27章)

「ろくろが等しい速さで回っている」「ろくろの回転が長くかかる」「ろくろの回転が長くかからない」(第23章)

「時間について既に長いこと語った」(第25章)

音について「どれほど長い」「どれほど短い」「他の音に等しい」「他の音の2倍だ」と言う。(第27章)

「この沈黙はあの沈黙と同じ長さだけ続いた」(第27章)

歌・詩・話・運動・沈黙の時間の長さについて、「これはあれの何倍だ」と言う。(第27章)

このように、アウグスティヌスは時間の長さに関する語りの例を数多く取り上げている。時間の長さの測定の問題が彼にとって大きな難問であったことが窺われる。

(2) 時間の長さに関する不整合

我々は、日常の談話において、例えば、これまでの百年間を「過去の長い時間」と呼び、これまでの十日間を「過去の短い時間」と呼ぶ。そして、アウグスティヌス(第15章)によると、我々の心には時間の長さを知覚してそれを測る能力が与えられている。実際、我々は日常的に時間の長さについて上のようにいろいろな仕方で語っているから、我々の前概念的時間理解には「時間の長さ」に関する理解が含まれていることは確かであろう。

しかし、この「時間の長さ」という前概念的時間理解は、先に時間の動的性格から導かれた時間の非存在と鋭く対立する。アウグスティヌスは「存在しないものがどうして長かったり短かったりできようか」(第15章)と言う。存在しないものはいかなる性質も持つことができない。それゆえ、存在しないものは長さも持たない。過去も未来も存在しないから、長さを持たない。では、現在についてはどうか。現在の存在についての懷疑(第14章)が正しい場合はもちろん過去や未来と同じことになるが、仮に現在が存在するとしてもアウグスティヌスの現在瞬間説(第15章)によれば、現在にはいかなる長さもない。結局、アウグスティヌスは言う。

「私は時間を測るということを知っている。しかし、私は未来を測るのではない。未来はまだ存在しないから。また現在を測るのでもない。現在はどんな長さにも広がっていないから。また過去を測るのでもない。過去はもはや存在しないから。」(第26章)

こうして、我々が測る時間は未来・現在・過去のいずれでもありえないことになる。「時間の長さの測定」と現在瞬間説・過去非在説・未来非在説との間に不整合が生じるのである。この不整合をアウグスティヌスはどうやって解決するのか。

アウグスティヌスは「運動と時間の関係」（第23章、第24章）「過ぎ去りつつある時間」（第16章、第21章、第26章、第27章）「心の広がり」の測定」（第27章、第28章）という順に検討して行く。あらかじめ言っておけば、彼は、検討の結果、前2者を捨て、最終的には、「時間の測定とは心の広がり」の測定だ」という結論に達する。

9. 運動と時間

まず、「時間の長さを運動の長さによって測定する」という可能性についてアウグスティヌスは検討する。もし、これが可能なら、時間の長さの測定も可能だということになる⁷⁾。しかし、彼は、検討の結果、この可能性を否定し、「運動の長さが時間の長さによって測定されるのであって、その逆ではない」という結論に至る。彼はまず天体の運動（第23章）について、次に物体一般の運動（第24章）について検討している。

（1）天体の運動

アウグスティヌスは、「天体の運動が時間である」という説について検討し、それを否定する。彼は、「天体の回転運動」「ろくろの回転運動」「言葉を語ること」「戦い」という4つの運動を取り上げ、次のような議論を行う。

仮に天体が停止しても、他の3つの運動は生じうる。例えば、「かつて或る人の願いによって戦いに勝つまで太陽が停止したときにも、停止したのは太陽だけであって、時間は流れていた」（第23章）。また、天体が停止していても、ろくろの運動について我々は「等しい速さで回っている」とか「速く回転している」などと言うことができるであろう。つまり、天体が止まっても運動の速さを測る時間は存在し続けているであろう。さらに、仮に太陽の日周運動の速さが変化して12時間で一周するようになった場合、我々はその時間を「1日」とは呼ばず、むしろ「今までは1日に1周していたが、1日に2周するようになった」と言うであろう。つまり、運動そのものが時間なのではなく、運動の行われている間（mora）が時間である。アウグスティヌスはこのように主張する。

（2）物体一般の運動

次に、天体に限らず物体の運動一般と時間の関係についてアウグスティヌスは検討する。その結果、彼は、「いかなる物体も時間において動く」が「物体の運動そのものが時間」なのではなく（第24章）、「物体の運動を時間によって測るのである」（第26章）という結論を出す。その議論は次の通りである。

（i）同一の物体が運動と静止を繰り返す場合

この場合、我々は「動いていた時間と同じ時間だけ静止していた」とか「動いていた時間の2倍静止していた」「動いていた時間の3倍静止していた」などと言う。それゆえ、運動そのものは時間ではない。アウグスティヌスはこのように主張する。彼の議論を補えば次のようになるだろう。

もし運動そのものが時間なら、静止しているときは時間は経過していないはずだ。しかし、我々は静止している時間と運動している時間とを比較することができる。したがって、運動そ

のものは時間ではない。

このような推論を彼は行なっているのだと思われる。

(ii) 複数の運動の比較

さらにアウグスティヌスは次のように議論を進める。

運動の長さの測定は、当該運動の開始と終了とを知らなければ不可能である。開始と終了を知らずに運動の最中だけを知覚している場合は、運動の長さではなく、知覚の長さを測定できるだけであって、運動の長さの測定はできない。例えば移動する物体の出発点と到達点を明示できるような場合、当該移動の開始と終了とを知りうるから運動の長さを測定できる。これに対し、知覚の長さしか測定できない場合、「長い時間だ」程度のことは言いうるが、「どれほどの長さか」までは言えない。なぜなら、「どれほどの長さか」を言うためには「これはあれの2倍だ」のように比較することが必要だからである。アウグスティヌスはこのように言う。

しかし、この議論からどのようにして「物体の運動と、その運動がどれだけ続くかを私たちがそれによって測るもの（即ち測定尺度）とは別だ」という結論が出て来るのか。以下のように補うことができよう。

まず、「運動の開始と終了とを知らなければ、運動の長さがどれほどであるかは言えない」という主張をする際には次のような推論が働いていると思われる。

運動の開始と終了とを知らなければ、複数の運動の長さを比較することはできない。

複数の運動の長さを比較することができなければ、運動の長さがどれほどであるかは言えない。

したがって、運動の開始と終了とを知らなければ、運動の長さがどれほどであるかは言えない。

ここで注目すべきは「複数の運動の長さの比較」という点である。比較される運動が複数であるということは、「これはあれと同じ長さだ」「これはあれの2倍だ」などの彼が挙げた例から明らかであろう。すると、運動の長さの測定とは、実は「複数の運動どうしの比較」だということになる。その場合、測定尺度はそれら複数の測定対象に共通であって、しかも、それら測定対象とは別のものでなければならない。このような推論によって、複数の運動と測定尺度（即ち、それらの運動がどれだけ続くかをそれによって測るもの）とは別物だ、という結論が導かれたのだと考えられる。

このように考えると、上記（i）の同一物体が運動と静止を繰り返す場合も、運動と静止とに共通で、しかも、それらとは別の何かが測定尺度だということになるであろう。

結局、アウグスティヌスは「運動の長さの測定によって時間の長さを測定する」という可能性を否定し、逆に「運動の長さこそが時間の長さによって測定される」即ち「物体がそのうちを運動する時間を測ることによって物体の運動を測るのだ」と主張するに至る。要するに、時間の測定が運動の測定を可能にするのであって逆ではない、ということである⁸⁾。

10. 過ぎ去りつつある時間

(1) 過ぎ去りつつある時間と過ぎ去ってしまった時間

こうして、時間の動的性格から導かれた「過去・未来非在説」「現在瞬間説」と「時間の長さの測定」との不整合を「運動の長さの測定」によって回避しようとする道をアウグスティヌスは否定し、第26章から再び時間の長さの測定についての検討をやり直す。

彼は言う。「運動が時間によって測られるのであるなら、では、時間は何によって測られるのか」「短い時間によって長い時間を測るのか」。しかし、本論文第8節で述べたように、未来と過去は存在しないが故に測れず、現在はどんな長さにも広がっていないが故に測れない。にもかかわらず私は時間を測っている。では、私は何を測るのか。「私は現に過ぎ去りつつある時間を測るのであって、既に過ぎ去ってしまった時間を測るのではない」(第26章⁹⁾)。彼は「現に過ぎ去りつつある時間 (*tempora praetereuntia*)」と「既に過ぎ去ってしまった時間 (*tempora praeterita*)」(即ち、過去)とを対比し、測られるのは前者であって後者ではない、と主張する¹⁰。「現に過ぎ去りつつある時間」は「瞬間としての現在」と異なり、なんらかの「広がり」を持ち、測られる対象としてふさわしいと思われたのであろう。

(2) 過ぎ去りつつある時間の測定不可能性

しかし、アウグスティヌスは、さらに検討を続けた結果、第27章において、この主張を自ら否定するに至る。その理由を一言で言えば、「現に過ぎ去りつつある時間には終端 (*terminus*) がないから、長さを測定できない」ということである。

彼は「或る物体の音が響き始め、響き続け、そして響き終わる」という具体例を取り上げ、いかにして時間の長さが測られるかを検討する。そこでは、次の3つの段階が区別されている。

- (1) 音が響き始める前の静寂が続く段階 (音が響く前)
- (2) 音が響き始め、響き続けている段階 (音が響いている最中)
- (3) 音が響き終わり、再び静寂が続く段階 (音が響いた後)

これらのうち、(1)の「音が響く前」と(3)の「音が響いた後」は、その音が存在しないから、測ることはできない。これは、過去・未来非在説から既に導出済みである。では、(2)の「音が響いている最中」にその音の長さを測るのではないのか。これこそが「現に過ぎ去りつつある時間」であり「広がり」を持つ時間なのではないのか？ しかし、アウグスティヌスは「響いている最中の時間を測ることはできない」と言う。なぜか。我々は時間の長さを測る場合「響き始める発端からもはや響かなくなる終端までを測る」のであって「まだ終わらない音を測ることはできない」からである。これは先に本論文第9節で取り上げた、運動の測定に関する「運動の開始と終了とを知らなければ運動の長さを測れない」という議論と同じ構造の議論である。時間の長さについても、その発端と終端とを知らなければ長さは測れず、それゆえ、響いている最中は、まだその長さを測ることはできない。しかし、かといって、響き終わったら、もはやその音は存在しないが故にやはり測ることはできない。結局、アウグスティヌスは言う。

「私たちが測るのは、まだ存在しない時間 [a] でもなく、もはや存在しない時間 [b] でもなく、少しも延長を持たない時間 [c] でもなく、また終端を持たない時間 [d] でもない。それゆえ、私たちは未来の時間 [a] をも、過去の時間 [b] をも、現在の時間 [c] をも、また過ぎ去りつつある時間 [d] をも測るのではない。しかし私たちは時間を測るのである。」(第27章)

こうして、時間の長さの測定をめぐるアポリアはその頂点に達する。アウグスティヌスはど

のように解決するのか。

11. 心の広がりとしての時間

(1) 心的内容の測定

彼の解決策は、先に、時間の動的性格と過去物語・未来予言との不整合を、「存在しない過去・未来」と「存在する心的内容（記憶・予期）」の区別によって回避したのと同様の解決策である。要するに、「測定されるのは、存在しない過去や未来ではなく、存在する心的内容（記憶・予期）である」という解決策である。

アウグスティヌスは短音節と長音節を交互に発音するという例を取り上げる（第27章）。例えば私が「Deus Creator omnium デ・ウス、クレ・アー、トル・オム、ニ・ウム（神よ、すべての造り主）」という言葉を発音する場合、偶数番目の長音節は奇数番目の短音節の2倍の長さだということは感覚によって私に明らかである。つまり、私は長音節と短音節とを比較している。しかし、この比較はいかにして可能か。第一に、長音節が鳴り始めるときにはその前の短音節は既に鳴り終わっている（存在しなくなっている）し、第二に、長音節も鳴り続けている最中（終端に達していないうち）はその長さを測ることはできない。とすれば、長音節と短音節とを比較しようとするときには、既に両者とも存在しなくなっている。にもかかわらず、確かに我々は両者を比較することができる。

ここから、アウグスティヌスは、次の結論を導く。

「私が測るのは、もはや存在しない音節そのもの〔A〕ではなくて、何か私の記憶の中に刻み付けられて留まっているもの〔B〕である。」（第27章）

「私は現存する印象（*affectio*）〔B〕を測るのであって、その印象を生ぜしめて過ぎ去ったもの〔A〕を測るのではない。」（第27章）

即ち、長音節（A）も短音節（A）も既に存在しない。しかし、それらが私の記憶の中に刻み付けていった印象（B）は今もなお存在している。結局、私は、既に過ぎ去ってしまっただけで存在しない長音節と短音節（A）どうしではなく、私の記憶の中に存在している長音節の印象と短音節の印象（B）どうしを、比較するのである。

アウグスティヌスは第27章でさらに(i)沈黙と音とを比較する場合を取り上げる。我々は、音が存在しないにもかかわらず沈黙の長さを測定できる。また、(ii)我々は、声に出すことなく、心の中で、歌や詩などを唱え、それらの部分について、その長さを比べることもできる。例えば、先の「Deus Creator omnium」という言葉を声に出さず心の中で考えるだけで、偶数番目の音節が奇数番目の音節の2倍の長さであることを測ることができる。アウグスティヌスによれば、これら(i)(ii)のことが可能なのは、我々が、音そのものではなく、心の中の印象を測っているからだということになる。また、(iii)我々は、声に出す前に音の長さをあらかじめ心の中で決めることもできる。例えば、これから歌う曲をどのようなテンポで歌うかを考えるような場合である。このときも音はまだ存在しない。しかし、我々の心の中には音の予期が既に存在しており、その予期の長さが測られるのだ。彼はこのように考えていると思われる。

結局、時間の長さの測定についてのアウグスティヌスの最終的な結論は次のようなものである。

「未来がまだ存在しないことを誰が否定するだろうか。しかし、にもかかわらず、未来についての予期は心の中に既に存在する。過去がもはや存在しないことを誰が否定するだろうか。しかし、にもかかわらず、過去についての記憶は心の中にまだ存在する。[…]

だから、長いのは未来の時間ではない。長い未来とは未来についての長い予期 (longa expectatio futuri) である。また、長いのは過去の時間ではない。長い過去とは過去についての長い記憶 (longa memoria praeteriti) である。」(第28章)

このように、アウグスティヌスは、時間の長さの測定とは、実は、予期や記憶という心の広がり (distentio animi) の長さの測定だと主張するに至る。

この解決策は過去物語・未来予言に関する解決策と同じ構造を持っている。結局、アウグスティヌスは、「時間の動的性格」から導かれた「時間の非存在への親近性」を維持しつつ、「過去物語・未来予言」や「時間の長さの測定」から導かれた「時間の存在」を確保するために、後者に言う「時間の存在」は実は「心的内容(記憶・予期)の存在」なのだ、という主張をするのである。整理すると、次のようになる。

(1) 時間の動的性格 → 時間の非存在への親近性(過去・未来非在説, 現在瞬間説)

(2) 過去物語・未来予言 → 時間の存在 → 心的内容(記憶・予期)の存在

(3) 時間の長さの測定 → 時間の存在 → 心的内容(記憶・予期)の存在

さらに細かく表にまとめると次のようになる。

	A：事物	B：心的内容	C：言葉	D
	存在しない	存在する 現在に属する	存在する 現在に属する	AとBのつながり
過去物語	過去の事物	記憶	過去物語	Aの痕跡がB
未来予言 (行為)	未来の行為	予期(意図)	行為の予告	Bの実現がA
未来予言 (出来事)	未来の出来事	予期 (概念・表象)	未来予言	BはAの(現在において存在する)原因・徴候に基づく
時間の長さの測定	過去の事物 未来の事物	記憶 予期	長さの比較	痕跡 意図, 原因・徴候

この表で、Aは現在において存在しないのに対し、BCは現在において存在する。また、Cの言葉はBの心的内容に基づいて発せられる。Dは存在しないAと存在するBとのつながりである。例えば、記憶は過去の事物が私の心に痕跡として刻み込んだものである。また、未来の行為を私が予告できるのは、その行為が私の意図の実現だからであり、未来の出来事を私が予言できるのは、その出来事の原因や徴候が既に存在しているからである。時間の長さの測定の場合にも、Aの事物とBの心的内容とは同じような仕組みでつながっていると考えられる。

(2) 予期・記憶の「長さ」

しかし、時間の長さの測定の場合、過去物語や未来予言の場合にはない固有の問題がある。それは、「長い予期」「長い記憶」とは何かという問題である。即ち、記憶や予期の「長さ」とは何かという問題である。

アウグスティヌスは歌の例を挙げる（第28章）。私がこれから1曲の歌を歌うとする。まだ声は出していない。このとき私の予期はこの曲の全体に向かっている。私は歌い始める。次から次へと新しい音を私は出す。出された音は次々に消えて行くが、それらは私の記憶に印象を残して行く。私が歌い続けるにつれ、この記憶は増え続け、逆に予期は減り続ける。そして、歌い終わると予期はすべて無くなり、歌の印象の全体が記憶の中に含まれている。

このように、歌い始める前に私の予期は曲全体へ向かっているのではあるが、だからといって、この曲を実際に歌うのに必要な時間と同じ長さの時間が、この予期を持つために必要なわけではない。例えば、演奏に5分間かかる曲を歌う場合、歌い始める際、私がこの歌の全体に予期を向けるのに5分かかるわけではない。同様に、過去の10分間と過去の5分間を比較する場合、思い出すのに5分や10分かかるわけではない。

つまり、「記憶や予期の長さ」と言っても、記憶や予期そのものが長さを持っているのではなく、記憶や予期の言わば「内容」に長さが含まれているのだと考えられる。しかし、いかにして記憶や予期の内容が長さを持ちうるのか。アウグスティヌスは「時間とは心の広がりである」（第26章）と言い、「お前〔＝心〕には時間の長さを知覚しそれを測る能力が与えられて」（第15章）おり、「長音節が短音節の2倍の長さを持っていると感じられるのは感覚によって明らかである」（第27章）と言う。しかし、いかにして記憶や予期の内容が長さを持ちうるのかに関して彼は十分に説明していない。

アウグスティヌスによれば、記憶は過去の事物が私の心に刻み込んだ痕跡のようなものである。では、その痕跡がいかにして長さを私に教えうるのか。1分間の長さの歌の記憶であってもそれを思い出すのに1分かかるのではないとすると、その痕跡の中身にその歌が1分間の長さであったことが含まれていなければならないが、そのようなことがいかにして可能なのか。

同じことは予期についても言える。予期の場合、まだ不在の未来の事物を現在の予期につながるの意図や原因・徴候であった。では、これから約10秒間声を出そうと私が意図する場合、この意図を持つのに10秒かかるのではないとすると、その意図の中身に「今から出す声が約10秒間の長さである」ということが含まれていなければならない。それはいかにして可能なのか。あるいは、日の出のような出来事の場合、「まだしばらく先だ」「もうすぐだ」「さあ、いよいよだ」というように日の出までの時間の長さを我々は測っているが、この測定のもとになるのは、日の出の徴候としての曙光である。曙光の知覚に基づいて予期の「長さ」が変化している。この場合も、それぞれの予期を行うのに要する時間の長さが後者ほど短いというわけではなく、予期の内容に含まれている日の出までの時間の長さが後者ほど短いのだと考えるべきであろう。

確かに、歌という例の場合、「歌うにつれ、予期の長さが減り、記憶の長さが増える」という彼の説明が当てはまるように感じられるかもしれない。私が一曲の歌を歌うとき、（記憶や予期の長さを私がどうやって測っているかは不明だとしても、）「歌い続けるにつれ予期が減って記憶が増える」という彼の説明には我々の実感に訴えるものが確かにある。また、アウグスティヌスが「時間の長さの測定」として取り上げた（本論文第8節で列挙した）さまざまな語り方のうち、「この音節はあの短い音節の2倍の時間である」「ろくろが等しい速さで回ってい

る」などについても彼の説明には或る程度の説得力があるかもしれない。というのは、これらの例のように過ぎ去りつつある時間の中で経験される近い未来や近い過去の場合、確かに我々は「時間の長さ」を言わば直接に知覚しているように感じられるからである。

しかし、仮にそうだとしても、アウグスティヌスの説明はすべての語り方に当てはまるだろうか。「彼がこのことを言ってからどれほどになる」「彼がこのことをしてからどれほどになる」「どれほどの間それを見ない」などの言い方についてはどうだろうか。例えば、「彼が死んでから1年経つ」というような語り方に関して「記憶の長さ」とは何を意味するのか。「1年という長さを持つ記憶」とは何であるのか。無論思い出すのに1年かかるわけではない。かと言って、歌の場合のように「その長さを直接知覚している」ように感じられもしないだろう。では、この場合の「記憶の長さ」とは何か。アウグスティヌスは説明していない。

したがって、また、アウグスティヌスはその時間探究の末尾にあたる第28章の最後で、「予期が短くなり、記憶が長くなる」という歌の場合に起こるのと同じようなことが「歌を部分とする活動においても」「活動を部分とする人の一生においても」「人の一生を部分とする時代全体においても」起こると言っているが、時間の長さに関する彼の説明をこのように拡張できる根拠は示されていないことになる。

結局、アウグスティヌスは、予期や記憶の「長さ」とは何であるかに関して十分な説明をしていないと言わざるを得ない。

12. 時間の向き

(1) 心の作用の順序

ところで、「予期の減少に伴って記憶が増加する」というアウグスティヌスの説明は、時間の長さの測定だけでなく、時間の動的性格についても独自の説明を提供している。

時間の動的性格とは「何かがやって来て、今を経て、過ぎ去って行く。未来から現在を経て過去へと移り行く」ということであり、「常に静止する永遠」と違って時間とは「流れてやまないもの」だということはアウグスティヌスの時間探究の根本前提であった。

過去・現在・未来の存在についてアウグスティヌスは次のように主張している。

「過去・現在・未来という3つの時間が存在するとは言えない。[……] 過去の現在、現在の現在、未来の現在という3つの時間が存在すると言うべきだ。[……] この3つは心以外のどこにも見出せない。過去の現在とは記憶 (memoria) であり、現在の現在とは直覚 (contuitus) であり、未来の現在とは予期 (expectatio) である。」(第20章)

「心は予期し (expectat), 直覚し (attendit), 記憶する (meminit)。心が予期するものは、直覚するものを経て、記憶するものへ移って行く。」(第28章)

したがって、「未来から現在を経て過去へと移り行く」という時間の動的性格が意味することは、実は「心が予期するものは、直覚するものを経て、記憶するものへ移って行く」ということであり、要するに、「予期の減少に伴って記憶が増加する」ということである。アウグスティヌスは時間の動的性格をこのような仕方で再解釈している。

しかし、彼のこの説明には一つの難点がある。それは時間の動く向きに関してである。時間は「未来から現在を経て過去へと移り行く」のであって、「過去から未来を経て現在へと移り行く」とか「現在から過去を経て未来へと移り行く」ということはない。例えば、私が或る曲

を歌う場合、私が歌い進むにつれ、「予期がますます減少し、記憶がますます増加する」のであり、その逆に、「予期がますます増加し、記憶がますます減少する」ということはない。しかし、予期も直覚も記憶も、思考・意志・感情などと並んで、心の持つ多様な作用の一つに過ぎない。心の作用がどのような順序で働くかに関して一般的な法則はないであろう。我々の精神生活において通常これらの作用はランダムな順序で生じている。では、或る曲を歌う場合になぜその曲は「予期→直覚→記憶」という順序で経験されるのか。なぜ「記憶→直覚→予期」とか「直覚→記憶→予期」という他の順序で経験されないのか。アウグスティヌスは「未来・現在・過去」をそれぞれ「予期・直覚・記憶」と同一視し、それらは「心以外には見出せない」と言うが、もし、時間の動的性格が「予期・直覚・記憶」という心の作用にのみ由来するなら、時間の向きが一定である理由はないことになるであろう。

（２）痕跡・意図・原因・徴候と時間の向き

実は、アウグスティヌスは、心の作用以外のものを、時間の動きの向きに関わるものとして、事実上認めている。それは「痕跡」「意図」「原因」「徴候」などである。本論文第５節と第６節で述べたように、「存在する記憶」が「存在しない事物」の記憶であるのは、前者が後者によって心に刻み込まれた痕跡だからであり、「存在する予期」が「存在しない事物」の予期であるのは、(a)存在しない事物が私の意図の実現としての行為であるか、あるいは、(b)存在しない事物の原因ないし徴候である或る事物が存在していて、私がこの原因ないし徴候に基づいて予期するからである。このように、「痕跡」「意図」「原因」「徴候」は「存在する記憶や予期」と「存在しない事物」とをつなぐ役割を果たしている。（本論文第11節の表を参照。）

そして、時間の動きの向きとの関連で重要なのは、「存在する記憶や予期」と「存在しない事物」とは一定の順序でしかつながらないということである。即ち、次の(1)～(3)が常に成り立っているということである。

- (1) 痕跡を残す事物は痕跡（記憶）よりも先立つ。
- (2) 意図は意図の実現（行為）よりも先立つ。
- (3) 徴候（曙光など）はそれが示す事物（日の出など）よりも先立つ。

尤も、「残す」「先立つ」という言い方は既に或る方向を含意しているから、一層厳密に言えば、次のように言うべきであろう。

「痕跡が示す事物」から「痕跡」へ、という方向と

「意図」から「意図が目指す行為」へ、という方向と

「徴候」から「徴候が示す事物」へ、という方向とは、同じである。

これらの方向の同一性をアウグスティヌスは暗黙の内に前提していたから、「予期→直覚→記憶」という順序しか考えなかったのではないか。しかし、これら３つの方向は心の中で生じている変化の向きではない。痕跡（記憶）や意図は確かに心の中に存在するであろうが、「痕跡が示す事物（痕跡を残す事物）」も「意図が目指す行為（意図の実現としての行為）」も心の外に存在するし、「徴候」と「徴候が示す事物」は両者とも心の外に存在する。少なくとも、アウグスティヌスは「痕跡を残す事物」「行為」「徴候」「徴候が示す事物」が心の中に存在するという主張はしていない。

結局、彼は、「我々の心の外の世界で生じる変化が一定の方向を持ち、この変化の向きと時間の向きが関連している」ということを事実上前提しているように思われる¹¹⁾。

13. 現在について

本論文での検討から明らかなように、アウグスティヌスの時間探究の中で「現在」という時間は重要かつ微妙な位置を占めている。彼の「現在」に関する見解を最後に見ておこう。

(1) 存在と現在との同一視

アウグスティヌスは、一方では、本論文第2節で述べたように、時間の動的性格から、現在という時間の存在に関する懐疑を導く。その根拠は、現在が「過去に移り行くことによってのみ時間である」ということ、即ち「存在する原因が非存在〔過去〕に成ることであるもの」だということであった。また、本論文第7節で述べた彼の現在瞬間説からも現在という時間の「はかなさ」即ち「非存在への親近性」が導かれる。

しかし、彼は、他方で、現在という時間と存在との強い結びつきを主張する。まず、時間探究冒頭の第14章で時間の性格付けをする際に、彼は「何も存在しなければ現在という時間はない」と言い、また、本論文第5節で述べたように、過去や未来の存在を問題にする際、「未来と過去がどこに存在するにせよ、そこにおいては、それは未来でも過去でもなく現在である。〔…〕どこにあるにせよ、およそ存在するものはすべて現在としてのみ存在する」（第18章）と言う。つまり、彼は「何も存在しなければ現在はなく、何かが存在すればそれは現在としてのみ存在する」と考えている。ここからは、「現在」と「存在」とを彼がほとんど同一視していることが窺われる¹²⁾。

しかし、「非存在への親近性」と、「存在との同一視」とは矛盾しないか。両者を整合的に解釈することは可能か。両者の整合性を確保しようとすると、そこから導かれるのは「存在そのものの非存在への親近性」であろう。ただし、「現在という時間の非存在への親近性」は時間の動的性格から導かれたものであるから、ここに言う「非存在への親近性を持つ存在」とは時間的存在に限られ、永遠的存在は含まれないことになる。このように、「現在」に関するアウグスティヌスの主張からは「時間的存在の非存在への親近性」即ち「時間的存在のはかなさ」が導かれると考えられる。

(2) 心的作用がなされる時間としての現在

アウグスティヌスの時間探究の中で、現在という時間は心的作用との関連においても重要な位置を占めている。彼は、「過去・現在・未来という3つの時間が存在する」のではなく「記憶（過去の現在）・直覚（現在の現在）・予期（未来の現在）」という3つの「現在」が存在するのだと言う（第20章）。記憶も予期も存在しない事物に関わるが、記憶や予期自体は現在における存在である。即ち、記憶の場合の「心象（*imago*）・印象（*affectio*）」も予期の場合の「意図（*praemeditatio*）、概念（*conceptio*）、表象（*imaginatio*）」も私の心の中に現在において存在している。

例えば、彼は、記憶について「少年時代を想起し物語るときに、私は少年時代の心象を現在という時間において見る」（第18章）と言い、予期について「見ることができるのはただ現にあるものだけだ。〔…〕曙光も表象も〔…〕現在あるものとして認識される」（第18章）と言い、また、時間の長さの測定について「現在ある印象そのものを私は測るのだ」（第27章）と言う。つまり、私が見ることができるのは現在における存在のみだということである。

ところで、今引用した予期の例に言う「表象」は私の心の中に存在するものだが、他方、日の出の徴候である「曙光」は私の心の外に存在するものである。このように心の外にある徴候や原因が知覚されるのも現在においてである。そして、知覚 (sensus) は直覚 (contuitus, attentio) の一種であろう。というのは、彼は、「心が予期するものは、直覚するものを経て、記憶するものへ移って行く」(第28章)と言って、歌の例を出す、その場合、私が現に発声している音を聞くことが直覚に当たるからである。また、知覚の他には、自分が今心の中に持っている感情なども直覚の対象になるであろう。つまり、記憶や予期が存在しない事物に関わる心的作用であるのに対し、直覚は存在する事物に関わる心的作用である¹³⁾。

要するに、記憶・予期・直覚のいずれの場合であれ、また、心の内であれ心の外であれ、私が見ることができるのは現在における存在だけである。アウグスティヌスはこのように考えている。

彼のこの考え方からすれば、「現在とは心的作用がなされる時間のことである」と定義することもできるだろう。

(3) 直覚の持続

アウグスティヌスは「現在という時間には広がりがないことを誰も否定しない。なぜなら、それは一点において (in puncto) 過ぎ去るから。にもかかわらず直覚は持続する (perdurat)」(第28章)と言う。しかし、今確認したように、直覚という心的作用は現在において存在する。では、「現在瞬間説」と「直覚の持続」との関係はどのように考えたらよいか。

ここに言う「持続」とはどういう意味であろうか。例えば、演奏時間が5分の曲を私が歌う場合、歌っている5分の間、私の直覚が持続するという意味か。また、「歌と同じことが人の一生でも起こる」とアウグスティヌスは言うが、私が生きている限り私の直覚は持続することか。

しかし、直覚の「持続」とはこのような意味ではないと思われる。なぜなら、本論文第11節で見たように、アウグスティヌスによれば、5分間という時間の長さとは、「存在しない過去や未来の長さ、あるいは、広がりを持たない現在の長さ」ではなく、「予期と記憶の長さ」だからである。

したがって、「直覚の持続」とは「心の広がり」の一つのあり方だと考えるべきであろう。即ち、「心の中に予期や記憶という広がりがある」ということが「直覚が持続する」ということを可能にしているということである。言い直せば、予期や記憶あってこそその持続だということである¹⁴⁾。直覚は予期の実現として私に受け止められ、記憶は直覚の痕跡として私の心に刻み込まれる。その際、その直覚が予期の実現であるということも併せて記憶される。予期と直覚と記憶の3者はこのように相互に関連しあっている。このように関連しあうこれら3者が心が向かっていることが即ち「心の広がり」であり、それが「直覚の持続」を可能にしている¹⁵⁾。

では、直覚の持続とは心の広がりなどのようなあり方なのか。ここで、本論文第10節で取り上げた「過ぎ去りつつある時間」(第26章)「過ぎ去りつつある現在」(第21章)「終端を持たない時間」(第27章)について改めて考えてみよう。例えば私が歌い続けている間、記憶は増加し続ける。直覚は常に新しい記憶を供給する。この状態のとき「直覚は持続している」と言えるであろう。しかし、私が歌い終わったとき(即ち「終端」に達したとき)、記憶の増加は終

わり、歌のすべてに記憶が向かう状態になる。もはや新しい記憶は供給されない。即ち、直覚の持続も終わる。終端に達する前の状態、即ち記憶が増加¹⁶⁾し続けている状態が「過ぎ去りつつある時間」であり、その限り直覚は持続している。このように考えることができる。つまり、直覚の持続には一定の区切りがある。即ち、内容に応じて区切りがある。というのは、歌のすべてに記憶が向かう状態になったときも、もちろん、他の内容を持つ直覚は私の心の中に存在しているからである。

(4) 時間の動的性格と心の働き

上述のような仕方では、予期・直覚・記憶の3者は互いに関連しあっているが、この関連に対して私の心の働きはどのように、そして、どの程度、寄与しているのか。言い直せば、時間という現象のどこまでが世界の側に依存し、どこまでが私の心の働きに依存するのか。

アウグスティヌスは「現在の志向 (intentio) が未来を過去の中へと投げ渡す (traicit)」(第27章) と言うが、この「投げ渡す」という言葉を強く取れば、「私の心こそが、時間の動的性格をもたらすのだ」という解釈ができるかもしれない¹⁷⁾。

しかし、率直に言って、この問いに対して『告白』第11巻第14章～第28章だけに基づいて確定的な答えを得るのは困難である。というのは、本論文第11節と第12節で検討したように、「予期や記憶の長さ」や「時間の向き」に関してアウグスティヌスの説明には不十分な点があるからである。特に「痕跡」「意図」「原因」「徴候」などの概念の位置づけが不明確である。

ただ、彼が時間の動的性格を言うとき、必ず現在に視点を置いて、それを言っていることは注目すべきであろう。度々引用する言葉だが、彼は「何も過ぎ去らなければ過去という時間はなく、何もやって来なければ未来という時間はない」(第14章) と言う。即ち、現在が過去になるとは「ここから」過ぎ去ることであり、未来が現在になるとは「ここに」やって来ることである。時間は非存在(未来)から「ここ」(現在)にやって来てまた非存在(過去)へと去って行く。このように時間の動的性格はいつも現在を中心に考えられている。そして、この現在という時間に私の心は存在している。アウグスティヌスの時間探究において、「現在」とは、「存在しない過去や未来と違って存在する時間」、ただし「存在しなくなるものとして存在している時間」、そして「心的作用がなされる時間」である。が、これらに加えて、「現在」とは「私の心が存在している時間」であるということもできよう。現在との関連においては「心」一般ではなく「私の心」の存在が問題である。というのは、「ここ」に在るのは心一般ではなく、私の心だからである。こうして、「今」「ここ」「私」という3つの直示語の表すものの間に何らかの本質的な関連があることをアウグスティヌスの時間探究は示唆しているように思われる。しかし、この点についてはアウグスティヌスから離れてそれ自体として考察すべきであろう。

おわりに

本論文では、アウグスティヌスの『告白』第11巻第14章から第28章を、創造論・永遠論あるいはキリスト教などの背景から切り離し、独立した時間論として読むことによって、時間そのものの解明へのヒントを得ることを目指した。

以上で見てきたようにアウグスティヌスはさまざまな論点を提出している。そのほとんどが

今日の哲学的時間論において決着がついていない論点である。例えば、探究の出発点にある「時間の動的性格」にしても、マクタガート¹⁸⁾以来、「それは、人間の主観的な感じ方に過ぎず、流れる時間など本当は存在しない」という主張の支持者も多い。また、時間の動的性格を認める立場においても、そこから過去や未来の非存在を導出できるか否かについては意見の相違¹⁹⁾がある。運動と時間の関係についても、ニュートン流の「絶対時間」との比較や、時間を「前と後とに関する運動の数」と見なすアリストテレスの立場（そこにおいても、測る主体としての心の存在が要請されている）との比較が必要である。また、アウグスティヌスの議論の内部において、(1)予期や記憶の「長さ」の問題、(2)時間の向きと「痕跡」「意図」「原因」「徴候」との関係、(3)時間の動的性格への心の寄与など、十分な説明がなされていない論点もある。

しかし、時間の哲学的解明において考察されねばならない多くの論点をアウグスティヌスは提出しており、彼の結論を受け入れるか否かとは別に、その議論は参照されてしかるべきであろう。

注

- 1) 第25章において、アウグスティヌスは、自分は「時間が何であるかを知らない」のか、それとも「[時間が何であるかを知っているが、] 知っていることをどのようにして述べるべきかを知らない」のか、どちらなのか分らないと言い、「自分は何を知らないのかさえも知らないあわれむべき人間だ」と言う。しかし、本文での我々の検討によれば、彼は、後者即ち「前概念的時間理解としての時間知は持っているが、説明能力としての時間知は持たない人間」だということになる。
- 2) アウグスティヌス自身、第17章で時間の存在について3つの可能性を考えている。それらの可能性については本論文第5節で述べる。
- 3) 現在に関するアウグスティヌスの見解については本論文第7節、第13節で論じる。
- 4) ただし、これは先の⑦「現在は存在しないかもしれない」という懐疑を撤回しているわけではなからう。「もしも存在するなら」そこにおいては現在だと仮定の下で言っているに過ぎないからだ。本論文第13節でこの点について再検討する。
- 5) Richard M. Gale, "A Reply to Smart, Mayo and Thalberg on 'Tensed Statements'," *Philosophical Quarterly*, vol.13, 1963, pp.352-353.
- 6) アウグスティヌスは第19章で預言について検討している。預言も未来の事物について語るが、それは、原因や徴候ではなく、神からの啓示に基づく。預言が未来の事物を告げることをどのように考えるべきかアウグスティヌスはここではそれ以上追究しないが、これは永遠と時間との関係についての興味深い問題である。
- 7) もちろん、その場合、運動が実在するということが前提されねばならず、運動の実在性と現在瞬間説・過去非在説・未来非在説との整合性という別の問題が生じる。
- 8) ただし、アウグスティヌスは第12巻第11章で「運動の変化のないところに時間はない」と言い、運動が時間の存在にとって必要であると主張する。
なお、アリストテレス『自然学』第4巻も「運動そのものは時間ではない」と主張するが、その論拠はアウグスティヌスの場合と異なる。即ち、(1)運動の局在性と時間の遍在性の違い、(2)運動の遅速、という二つの論点を根拠にしている。さらに、アリストテレスは「時間は運動そのものではないが、運動の何かである」と言い、「時間とは、前と後に関する、運動の数だ」と主張する。
- 9) アウグスティヌスは、第16章と第21章でも同様のことを述べている。

- 10) 「過ぎ去りつつある時間」と「過ぎ去ってしまった時間」の対比はベルクソンの「流れつつある時間 (temps qui s'écoule)」と「流れ去った時間 (temps écoulé)」の対比を思い出させる。ベルクソンは、「時間は空間によって十全に表象されうるだろうか。我々の答えはこうである。流れ去った時間についてならイエス、流れつつある時間についてならノーだ」(Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience* の第3章末尾)と言う。しかし、ベルクソンの場合、空間によって表象されることが量的に測定されることの必要条件である(同書第2章冒頭の「数的多数性」に関する考察)から、流れつつある時間についてその長さを測定することは不可能である。本文ですぐに見るように、アウグスティヌスも理由は異なるが最終的にはベルクソンと同じ結論に至る。
- 11) アウグスティヌス自身も第30章で「被造物なしにはどんな時間も存在することができない」と言う。しかし、だからと言って、John M. Quinnのように、アウグスティヌスには「心理学的時間・物理学的時間・道徳的時間・歴史的時間という4つの種類の時間」があるのだと言って済ませることはできない。というのは、谷隆一郎も言うように、『告白』において「アウグスティヌスは決して、何らか「もの時間」と並んで存立しているものとしての「心理学的時間」などを説こうとしているのではなくて、ただ一つの時間[...]を問うた」のだと思われるからである。
- John M. Quinn, *A Companion to the Confessions of St. Augustine*, P. Lang, 2002, pp.733-735.
- John M. Quinn, "Time," in Allan D. Fitzgerald ed., *Augustine through the Ages : an Encyclopedia*, William B. Eerdmans Publishing Co., 1999, pp.832-838.
- 谷隆一郎『アウグスティヌスの哲学：「神の似像」の探究』創文社, 1994年, p.112。
- 12) その際の「現在」は、本論文第5節で述べたように、「端的な現在」である。
- 13) 記憶とは、直覚内容(例えば、自分が出した声)の記憶だということになる。ただし、記憶には、直覚内容の記憶のみならず予期内容の記憶も含まれていよう。予期・直覚・記憶の3つがうまく連動して初めて歌うことが可能になるのだと思われるからである。
- 14) 岡野昌雄も「知覚は[...]決してひろがりをもった時間をとらえることはできない」と言う。ただし、岡野は「知覚(sensus)」と「直観」(本論文の「直覚」)を区別し、後者は「ひろがりをもった時間をとらえることができる」と言う。また、森泰男は「直観[直覚]から記憶も期待[予期]も生まれてくる」と言う。アウグスティヌス解釈としてこれらの用語をどのように理解すべきかについては保留する。
- 岡野昌雄『アウグスティヌス『告白』の哲学』創文社, 1997年, p.165。
- 森泰男「アウグスティヌスにおける時間と歴史」『西南学院大学文理論集』第18巻第2号, 1978年, p.36。
- 15) したがって、また、「心の広がりとしての時間」に言う「広がり」は過去や未来へ広がっているのではない。過去非在説・未来非在説によればそのような可能性はない。第28章でアウグスティヌスが言うように、この広がり記憶と予期へ向かう広がりである。もちろん、その際、本論文第11節で指摘した「予期や記憶の長さとは何であるか」という問題は残る。
- 16) 無論「記憶の増加」という概念は「記憶の長さ」という概念に依存した概念である。
- 17) 例えば、荒井洋一は「「過ぎる」ということは精神[本論文の「心」]の働きにおいて初めて可能になる」と言う。この「過ぎる」という言葉をどのような意味で取るかにもよるが、これは、心の寄与を大きく見積もる解釈であろう。
- 荒井洋一『アウグスティヌスの探求構造』創文社, 1997年, p.213。
- 18) J. E. McTaggart, "The Unreality of Time," *Mind*, vol.17, 1908, pp.457-474.
- J. E. McTaggart, *The Nature of Existence*, vol.2, 1927, Ch.33.
- 19) いわゆるpresentismをめぐる問題である。時間の動的性格を認める論者の間でもpresentismにつ

いて意見の相違があることについては、例えば次の2つの文献を参照せよ。

Michael Tooley, *Time, Tense, and Causation*, Clarendon Press, 1997, pp.234-240, “8.6 Presentism.”

Quentin Smith, “Time and Degrees of Existence: A Theory of ‘Degree Presentism,’” in Craig Callender ed., *Time, Reality & Experience*, Cambridge University Press, 2002, pp.119-136.

(2004年4月16日受理)